中野香織と、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

ドーバー越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織

FROM United Kingdom
中野香織 62

真実は、ささ来年に

映画史に見るM&Aの推移！　さすが、鋭い視点ですね。「ワーキング・ガール」なんて、セリフ丸覚えしたくらい何十回も見ていたはずなのに、そっか、あの話の背景にあったのはM&Aだったのか（何を今さら）。企業買収だの合併だの、当時は、「秘書が上司になりすまして恋もキャリアも手に入れる」話以上に現実にはありえない話としてぼわ～っと流してました。堀江社長（ドラえもんみたいな愛称では呼んであげない）のおかげで、ようやく現実味のある話として輪郭をもってきた感じです。

さて、M&A理解不能でもノリよく笑えた「ワーキング・ガール」の監督（マイク・ニコルズ）だし豪華キャストだし、と期待大で見にいきました、「クローサー」。

セリフが舞台くさい、と思ったらやはり舞台で成功したドラマなんですね。映画的興奮の点ではむむでしたが、男女間マナーの次元で、「現実にはありえない話」というか「現実には避けたい話」を疑似体験させてもらった点では、興味深かったです。

嫉妬に狂った男が「あいつと寝たんだろう、真実を言え、言えば許してやる」と女に具体的な〈真実〉の詳細を迫ったらどうなるのか。また、女がそれをホントに〈正直に〉言ってしまったらどうなるのか。

かの蝶々さんも、『小悪魔な女になる方法』（大和出版）で「認めないのが、マナーであり、お互いへの思いやり」と書いてますが、しかし、現実には地獄が待っているからこそフィクションの中で見てみたい。

映画はそんな下世話な期待にこたえ(?)、真実にもっと近づきたい（クローサー）と相手に迫ることが、取り返しのつかないほど遠いところへ相手を押しやってしまうことになるイタさを、これでもかと見せてくれました。ただ立ってるだけで美しいジュード・ロウやナタリー・ポートマンが青筋立て、涙流して「迫真の演技よ」風にやるもんだから、イタさも二乗で。「真実に迫る」って人を引かせるんですね。

真実に迫りたいけど、迫るわけにはいかぬ。こういうジレンマに悩むことって現実に少なくないですね。たとえば社交辞令か本気のお誘いか微妙な「こんど、お花見にでもぜひ」。

「じゃあ、何日の何時？」なんて、返せませんしね。連絡を待っているうちに花は散り……。編集担当者C嬢はその点、腹が据わってます。「来年でも、さ来年でも、ささ来年でも、という心構えで」だって。真実のありかは「藪の中」か「ささ来年」。現実のイタみから身を守るにはそのあたりにおいとくのがよいようで。

「クローサー」5月21日より丸の内プラゼールにて公開

オブジェ制作＝井上陽子